

餘日與會釋是疽之類也。當時瘡身如橋、赤輪四五許寸、在右肩上云々、廿三日癸酉召醫師成世遣寬救亭歸來云、吾疾病難救不愈、扁鵲何益乎、不令見瘡。

〔太平記〕資朝俊基關東下向事附御告文事

相摸入道何ヲ苦シカルベキトテ、齋藤太郎左衛門利行ニ讀進セサセラレケルニ、叡心不僞處任天照覽被遊タル處ヲ讀ケル時ニ、利行俄ニ眩暈タリケレバ、讀ハテズシテ退出ス、其日ヨリ喉下ニ惡瘡出テ、七日ノ中ニ血ヲ吐テ死ニケリ、

〔陰德太平記 六十七〕光秀弑信長卿事

天野源右衛門後ニ立花左近ニ筮仕セシガ、頰ニ腫物ノ生ゼシヲ拔ントセシニ、漸々ニ肉出テ瘡ザリケレバ、甚怒テ自裁シテ死スト云リ、又腫物平癒セズシテ死ス共云リ、

〔慶長見聞錄案紙 上〕慶長十年十月上旬、清洲下野守殿忠吉腫物御煩其後腫氣、十二月十日、下

野守殿忠吉御煩危急、自辰刻午刻迄、偏如死人、御口中江御藥を入、午刻御蘇生、十五日、下野守殿忠吉俄ニ滅ス、扱追日平癒、

〔塵塚談 上〕品川驛三丁目、飴屋長次郎忩市太郎十三歳、最初醫者ども風濕と名付療治せしよし、兩脚腫物出來、膿水夥しく出、蒲團は勿論疊迄くさり、病蓐より毎日菌生キノず、荒和布の莖の如くにして、黒くかたくして手にてはきれず、凡一ケ年程惱みて、天明元丑年夏病死す、死後背肉のこらす、隕骨計になる、手足はばらくに離れ、膝もはなれ六ツになれり、腹のみぞ皮肉あり、頭は離れず、奇怪の病也、右長次郎隣家加賀屋武右衛門が妻物語、此婆々父は藤澤驛大坂屋勘左衛門、俳名梅舎が娘也、女には稀なる性質にして、空言をいふものにあらず、

〔理齋隨筆 三〕子供くさかさ出來たるに、左の歌をかきて張をけば愈とぞ、

春の日の長に草もかりすてんとくかりつくせ庭の夏草